

# タイプPD”, PG方言の発見

## —熊本県北東部・大分県中西部方言の動詞テ形における形態音韻現象—

有元光彦

Morphophonological Phenomenon of the *Te*-form Verbs in the North-Eastern Dialects  
of Kumamoto Prefecture and the Middle-Western Dialects of Oita Prefecture

ARIMOTO Mitsuhiro

(Received September 28, 2012)

### 0. はじめに<sup>1</sup>

本稿の目的は、熊本県北東部方言及び大分県中西部方言を対象とし、動詞テ形のデータを挙げるとともに、そこに起こる特異な形態音韻現象を記述することにある。

この特異な形態音韻現象とは、有元光彦（2007a, 2007b）等と言うところの「テ形（音韻現象）」である。有元光彦（2010b: 54）によると、テ形現象は次のように定義されている。

#### (1) テ形現象の定義：

動詞テ形において、共通語の「テ」「デ」に相当する部分が、動詞の種類（語幹末分節音の違い）によって、様々な音声で現れる形態音韻現象。

例えば、ある方言△において、＜書いてきた＞を [kakkita] というように、共通語の「テ」に相当する部分にいわゆる促音が現れるとする。一方、＜取ってきた＞は\* [tokkita] とは言えず、[tottekita] という [te] が現れる形しか存在しないとする。このように、動詞の種類の違いによって、「テ」「デ」に相当する部分の分布に偏りがある場合、方言△はテ形音韻現象を持つと言う。

本稿では、熊本県北東部方言・大分県中西部方言のテ形音韻現象に新たな方言タイプが発見されたこと、またそれが真性テ形現象方言と擬似テ形現象方言という2つの方言タイプの関係性を理論的に示すこと、について記述する。

### 1. 方法論

本稿では、初期の生成音韻論 (Generative Phonology) の枠組みを利用する。この枠組みでは、基底形 (underlying form) に音韻ルール (phonological rule) が線的 (linear) に適用されることによって、音声形 (phonetic form) が派生される。<sup>2</sup> 基底形は、心内辞書 (mental

<sup>1</sup> 本稿の一部は、平成23年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究 (C) 「九州方言の音韻現象における接触・伝播・受容プロセスに関する研究」 (研究代表者：有元光彦・No.23520554) によるものである。フィールドワークにおいては、熊本県高森町・産山村・山都町及び大分県上津江町の各教育委員会及びインフォーマントの方々に大変お世話になった。記して感謝する次第である。

<sup>2</sup> 以下、基底形は記号//で、音声形は記号 [ ] でそれぞれ括る。

lexicon) に登録されている辞書項目 (lexical item) が形態的操作によって組み合わせられたものである。従って、活用形の1つであるテ形の語構成 (基底形) は、「動詞語幹+テ形接辞」となっている。

動詞語幹には次のようなものがある。

(2) a. 子音語幹動詞:

/kaw/<買う>, /tob/<飛ぶ>, /jom/<読む>, /kas/<貸す>, /kak/<書く>,  
/kog/<漕ぐ>, /tor/<取る>, /kat/<勝つ>, /sin/<死ぬ> など

b. 母音語幹動詞:

/mi/<見る>, /oki/<起きる>, /de/<出る>, /uke/<受ける> など

c. 不規則語幹動詞:

/i/~it/<行く>, /ki/<来る>, /s/<する>

ここでは、テ形に使われる語幹のみを挙げている。子音語幹動詞・母音語幹動詞の各語幹は他の活用形でも共通して使われるが、語幹を複数持つ不規則語幹動詞では活用形によって異なる語幹が使用される。

テ形接辞は、本稿で扱う方言においてはすべて/te/である。また、テ形接辞の直後には様々な単語が続く。例えば, [kita] <(〜)きた>, [mire]~[miro] <(〜)みろ> 等である。

## 2. データ属性

本稿で挙げたデータは、平成23 (2011) 年9月のフィールドワークによって収集されたものである。収集した地域は、熊本県阿蘇郡高森町・阿蘇郡産山村・上益城郡山都町、及び大分県日田市上津江町である。

秋山正次 (1983:210-214) によると、熊本県方言は「熊本北部方言」と「熊本南部方言」に大きく分類される。前者はさらに2つに下位区分され、阿蘇郡 (現阿蘇市近辺)・上益城郡の東北部方言 (熊本東部方言) とそれ以外の地域 (熊本北部方言) に分類されている。また、後者は、より詳細な観点から言えば、球磨方言、天草方言、及び八代・葦北方言の3つに下位区分されている。この方言区画に従えば、本稿で扱う熊本3地域の方言は、すべて熊本北部方言の東部方言に分類されている。

一方、大分県方言に関しては、糸井寛一 (1983:242-244) によると、「大分主流方言区域」「日田・玖珠方言区域」「東国東方言区域」「南部海岸方言区域」の4つに区画される。本稿の対象である上津江町方言は「日田・玖珠方言区域」に属する。

データは音声記号によって表記する。データの適格性については、各音声形の直前に以下のような記号を付けて示す。即ち、記号\*はその音声形が不適格であることを、記号\*?はやや不適格であることを、記号%はその音声形の方をよく使うとインフォーマントが判断していることをそれぞれ表す。記号&はインフォーマントが聞いたことがある (使用しない) と回答していることを表す。記号¥はインフォーマントが古い形である (使用しない) と回答していることを表す。また、記号----は調査漏れであることを表す。

また、本稿では語幹末分節音 (stem-final segment) が $\alpha$ である動詞を「 $\alpha$ 語幹動詞」と呼ぶ。例えば、語幹末分節音が/k/である動詞、/kak/<書く>は「k語幹動詞」と呼ぶ。「 $i_1, e_1$ 語幹動詞」は、語幹が1音節であるi, e語幹動詞を、「 $i_2, e_2$ 語幹動詞」は、語幹が2音節以上

のi, e語幹動詞をそれぞれ表す（インデックス番号が付いていない場合は両方を含む）。

### 3. 分析

本節では、各方言のデータを挙げつつ、テ形音韻現象のタイプを考察していく。

本節で挙げるデータ表では、方言形のみを音声記号で表記する。表の左端列に挙げていない語幹が使われる場合には、その都度注で説明する。

#### 3.1. 高森町方言

本節では、高森町方言のテ形音韻現象について記述する。【表1】に動詞テ形のデータを挙げる。A, B両氏はいずれも60歳前後の男性である。

【表1】高森町方言の動詞テ形

語幹	A氏	B氏	意味
kaw<買う>	ko:ʃikita *kokkita	ko:ʃikita	買った
tob<飛ぶ>	tondekita ¥to:ɖʒikita	to:ɖʒikita	飛んできた
asob<遊ぶ>	asodʒikita	asodʒikita	遊んできた
jom<読む>	jondekita ¥jo:ɖʒikita	jo:ɖʒikita	読んできた
ogam<拝む>	ogandekita ¥ogodʒikita	ogodʒikita	拝んできた
kas<貸す>	kafitekita *ka:ʃikita *ke:ʃikita	kafitekita *ke:ʃikita	貸してきた
okos<起こす>	okofitekita ¥okeʃikita	okofitekita	起こしてきた
kak<書く>	kaitekita *ke:ʃikita	kja:ʃikita	書いてきた
kog<漕ぐ>	koidekita *ke:ɖʒikita	koidekita *ke:ɖʒikita	漕いできた
ojog<泳ぐ>	ojoidekita ¥ojodʒikita	ojo:ɖʒikita	泳いできた
tor<取る>	tottekita *totʃikita	%ʃigittekita <sup>3</sup> ʃigitʃikita	取ってきた
kat<勝つ>	kattekita *katʃikita	%kattekita katʃikita	勝ってきた
sin<死ぬ>	ʃindemo *ʃindzimo	-----	死んでも

<sup>3</sup> 語幹は/tigir/<千切る>である。

mi<見る>	mitekita miʃikita *mitʃikita	mitekita *mittekita *miʃikita	見てきた
oki<起きる>	okitekita *okifʃikita	okittekita	起きてきた
de<出る>	detekita deʃikita *deʃʃikita	detekita *deʃʃikita	出てきた
uke<受ける>	ukeʃʃikita *uketʃʃikita	ukeʃʃikita	受けてきた
i~it~itate<行く>	ittekita itekita *itʃʃikita	ittekita itekita	行ってきた
ki<来る>	kitemiro *kiʃʃimiro	kitemiranna *kiʃʃimiranna	来てみないか
s<する>	ʃitekita *ʃiʃʃikita	ʃitekita *ʃiʃʃikita	してきた

まず、【表1】の子音語幹動詞を観察する。共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声は、語幹末分節音が/m, s, k, g, r, t, n/のときに [te], [de] が現れており、語幹末分節音が/w, b/のときに [ʃi], [dʒi] が現れている。

しかし、B氏では語幹末子音が/s/のときのみ [te] が現れている。それ以外のときには、[ʃi], [dʒi]が現れている。しかも、r, t, n語幹動詞の際にもこれらの音声が見れているということは、ひょっとすると熊本市方言の影響を受けているのかもしれない。実際、B氏は中学校・高校時代に熊本市に居住している。

また、A氏では、b, s, g語幹動詞の語幹が一音節である場合、[ʃi], [dʒi] が現れにくいという「音節数条件」が関わっているようである (cf. 有元光彦 (2007a: 212))。

次に、一段動詞を観察する。ここでは、語幹末分節音が/i<sub>1</sub>, e<sub>1</sub>, e<sub>2</sub>/の場合に [ʃi] が現れている。一段動詞の場合には、r 語幹化 (ラ行五段化) が関連するので、それを見るために、一段動詞の否定形・過去形を【表2】に挙げておく。

【表2】高森町方言の一段動詞の否定形・過去形

	A氏		B氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	*miN mirAN	mita *mitta	*miN mirAN	mita *mitta
起きる	*okiN okirAN	okita okitta	*okiN okirAN	okita okitta
出る	*deN derAN	deta *detta	*deN derAN	deta *detta
受ける	ukeN *ukerAN	uketa *uketta	ukeN *ukerAN	uketa *uketta

【表2】を見ると分かるように、まずA氏とB氏の分布状況は全く同じである。r 語幹化については、 $i_1, i_2, e_1$  語幹動詞で起こりやすいと考えられる。この中で最も r 語幹化しているものは、[okitta] <起きた> という形が現れることから、 $i_2$  語幹動詞であろう。従って、テ形音韻現象において、 $i_2$  語幹動詞の場合 [te] しか現れないのは、 $i_2$  語幹動詞の語幹末分節音が /r/ になっているからであろう。

また、不規則動詞においては [te] しか現れていない。

以上をまとめると、次のようになる。

- (1) a. [ʃi], [dʒi] が現れる場合： 語幹末分節音が /w, b/ のとき  
 b. [te], [de] が現れる場合： 語幹末分節音が /m, s, k, g, r, t, n/ のとき

高森町方言にも、有元光彦 (2007a) と同様のテ形音韻現象が観察されるので、次のようなルールを設定できる。

- (2) e/i 交替ルール (高森町方言) :

語幹末分節音が X でない動詞語幹にテ形接辞 /te/ が続く場合、  
 テ形接辞 /te/ の /e/ を /i/ に交替させよ。

X = /m, s, k, g, r, t, n/

以上から、高森町方言は擬似テ形現象方言であることが分かる。しかし、擬似テ形現象方言の中の方言タイプはどうであろうか。

(2) の X は、弁別素性で表すと、{[-syl, +cor], [+nas], [+back]} となる。<sup>4</sup> これを使用して、(2) を定式化すると、次のようになる。記号<sup>c</sup> は補集合を表す。

- (3) e/i 交替ルール (高森町方言) :

$e \rightarrow i / \{[-syl, +cor], [+nas], [+back]\}^c ] t \_ \_ ]$

有元光彦 (2007b : 31) によると、X の集合は理論的には予測されているものの、未発見のタイプであると記述されている。そこで、高森町方言のタイプを仮に「タイプPD<sup>'''</sup>方言」と呼んでおく。詳細は 5.1. に譲る。

### 3.2. 産山村方言

本節では、産山村方言のテ形音韻現象について記述する。【表3】に動詞テ形のデータを挙げる。C氏は80歳代の男性、D氏は70歳代の女性である。

<sup>4</sup> 本稿で用いる弁別素性は、[syl(labic)] (主音節性)、[cor(onal)] (舌頂性)、[cont(inuant)] (継続音性)、[nas(al)] (鼻音性)、[back] (後舌性)、[voice] (有声性) である。

【表3】産山村方言の動詞テ形

語幹	C氏	D氏	意味
kaw<買う>	ko:tekita *ko:ʃikita *kokkita	ko:tekita *ko:ʃikita *kokkita	買った
tob<飛ぶ>	tondekita *tondzikita	tondekita *tondzikita	飛んできた
jom<読む>	jondekita *jondzikita	jondekita *jondzikita	読んできた
kas<貸す>	kafitekita *kja:tekita	kafitekita *kja:tekita *ke:tekita	貸してきた
kak<書く>	kaitekita *kaifikita *kja:tekita	kaitekita *ʔke:ʃikita	書いてきた
kog<漕ぐ>	-----	-----	漕いできた
ojog<泳ぐ>	ojoidekita *oe:dekita *ojodzikita	ojoidekita	泳いできた
tigir<ちぎる>	ʃigittekita *ʃigitʃikita	ʃigittekita *ʃigitʃikita	ちぎってきた
kat<勝つ>	kattekita *katʃikita	kattekita	勝ってきた
sin<死ぬ>	ʃinde	ʃindemo	死んで(も)
mi<見る>	mittekita *mittekita *miʃikita	mittekita *mittekita *miʃikita	見てきた
oki<起きる>	okeʃikita	okitekita *okittekita *okifʃikita oketekita	起きてきた
de<出る>	detekita *dettekita *defʃikita	detekita *dettekita *defʃikita	出てきた
uke<受ける>	ukeʃikita	uketekita *ukettekita *ukeʃikita	受けてきた
i~it~itate<行く>	itekita *iʃikita	itekkita *iʃikita	行ってきた
ki<来る>	kitekunnai *kiʃikunnai	kitekunnai *kiʃikunnai	来てみる
s<する>	ʃitekita *ʃiʃikita	ʃitekita *ʃiʃikita	してきた

【表3】を見ると、C氏とD氏の違いがあることが分かる。C氏では、 $i_2, e_2$ 語幹動詞に限り、「テ」に相当する部分に [ʧi] が現れている。しかし、D氏では [te] のみが現れている。これは、母音語幹動詞の r 語幹化の問題であるので、前節と同様に、母音語幹動詞の否定形・過去形を【表4】に挙げる。

【表4】産山村方言の一段動詞の否定形・過去形

	C氏		D氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	*min miran	mita *mitta	*min miran	mita *mitta
起きる	oken okiran	okita oketa *okitta *oketta	oken *okeran	okita oketa *okitta *oketta
出る	*den deran	deta *detta	*den deran	deta *detta
受ける	uken *ukeran	uketa *uketta	uken *ukeran	uketa *uketta

【表4】から分かるように、 $i_1, e_1$ 語幹動詞では r 語幹化が進行している。 $i_2, e_2$ 語幹動詞では r 語幹化していない。従って、母音語幹動詞の場合に、次のようなルールが適用されると考える。

(4) e/i交替ルール (産山村方言) :

語幹末分節音がXでない動詞語幹にテ形接辞/te/が続く場合、  
テ形接辞/te/の/e/を/i/に交替させよ。

$X = /i, e/$

(4)のXは母音であるので、弁別素性を使って、(4)を次のように定式化できる。

(5) e/i交替ルール (産山村方言) :

$e \rightarrow i / [-syl]^c ] t \_ ]$

以上から、産山村方言の場合、インフォーマントにより違いがあり、C氏は擬似テ形現象方言であることが分かる。しかも、(5)の適用環境がXG=[-syl] であることから、「タイプPG方言」であるということになる。この方言タイプは、現時点までに見つけられていなかったタイプであり、それゆえ新発見である。詳細は5.2.に譲る。一方、D氏は非テ形現象方言(タイプN1方言)であると判断できる。

### 3.3. 山都町方言

本節では、山都町方言のテ形音韻現象について記述する。【表5】に動詞テ形のデータを挙げる。E氏は70歳代の男性、F,G,H氏は70~80歳代の女性である。F,G,H氏については同

時に聞き取り調査を行っている。

【表5】山都町方言の動詞テ形

語幹	E氏	F,G,H氏	意味
kaw<買う>	ko:ɸikita *kokkita	ko:ɸikita	買った
tob<飛ぶ>	to:ɸikita	to:ɸikita	飛んできた
jom<読む>	jo:ɸikita	jo:ɸikita	読んできた
kas<貸す>	kja:ɸikita	kja:ɸikita	貸してきた
kak<書く>	kja:ɸikita	kja:ɸikita	書いてきた
kog<漕ぐ>	ko:ɸikita	-----	漕いできた
ojog<泳ぐ>	ojodɸikita	ojo:ɸikita oe:ɸikita <sup>5</sup>	
tor<取る>	tottekita *totɸikita	ɸigittekita *ɸigitɸikita	取ってきた
kat<勝つ>	katttekita *katɸikita	katttekita *katɸikita	勝ってきた
sin<死ぬ>	----- *ɸindɸi	ɸinden *ɸindɸi	死んで(も)
mi<見る>	mittekita *mittekita *miɸikita ɸmikkita	mittekita ɸmi:ɸikita *mikkita	見てきた
oki<起きる>	okitekita okittekita okiɸikita okikkita	okitekita okittekita *okiɸikita	起きてきた
de<出る>	detekita *dettekita deɸikita *dekkita	detekita *dettekita ɸde:ɸikita	出てきた
uke<受ける>	ukettekita ukeɸikita ukekkita	*ukettekita ukeɸikita	受けてきた
i~it<行く>	itekita itekita *iɸikita	itekita &iɸikita	行ってきた
ki<来る>	kitekure kiɸikure	kitehaijo *kiɸihaijo	来てみないか
s<する>	ɸite (k) kita *ɸiɸikita	ɸitekita *ɸiɸikita	してきた

<sup>5</sup> これはG氏のみから得られたデータである。

【表5】を見ると、「テ」「デ」に相当する部分に [tʃi] ~ [dʒi] が現れる場合と, [te] ~ [de] が現れる場合, そして促音が現れる場合の3つの系列が観察できる。まず, [tʃi] ~ [dʒi] は, r, t, n語幹動詞, 及び不規則動詞では現れていないので, 次のようなルールを設定できる。<sup>6</sup>

(6) e/i交替ルール (山都町方言):

語幹末分節音がXでない動詞語幹にテ形接辞/te/が続く場合,  
テ形接辞/te/の/e/を/i/に交替させよ。

X=/r, t, n/

弁別素性を使って(6)を定式化すると, 次のようになる。

(7) e/i交替ルール (山都町方言):

e → i / [-syl, +cor, -cont]<sup>c</sup> ] t \_\_\_\_ ]

(6), (7)のようなルールを持つ方言タイプは, 擬似テ形現象方言 (タイプPA方言) である。  
次に, 促音は母音語幹動詞に現れている。この場合, 次のようなルールを設定できる。

(8) e消去ルール (山都町方言):

語幹末分節音がXでない動詞語幹にテ形接辞/te/が続く場合,  
テ形接辞/te/の/e/を消去せよ。

X=/r, t, n/

弁別素性を使って (8) を定式化すると, 次のようになる。

(9) e消去ルール (山都町方言):

e → φ / [-syl, +cor, -cont]<sup>c</sup> ] t \_\_\_\_ ]

(8), (9)のようなルールを持つ方言タイプは, 真性テ形現象方言 (タイプTG方言) である。  
母音語幹動詞においては, r 語幹化の問題が関連するので, 次に, 一段動詞の否定形・過去形を挙げておく。

<sup>6</sup> E氏には[kifikure] <来てくれ> が現れている。この例外については, 現時点では保留にするしかない。

【表6】山都町方言の一段動詞の否定形・過去形

	E氏		F,G,H氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	min miran	mita *mitta	min %miran	mita *mitta
起きる	okin okiran	okita okitta	okin okiran	okitta
出る	den deran	deta *detta	¥den deran	deta *detta
受ける	%uken ukeran	uketa uketta	uken *ukeran	uketa *uketta

【表6】を見ると、 $i_1$ ,  $i_2$ ,  $e_1$  語幹動詞でr語幹化しているようである。【表5】の母音語幹動詞における [ʧi] の分布を見ても、 $e_2$  語幹動詞以外は、古い形であるとインフォーマントが認識していたり、インフォーマントによって判断が異なっていたりしている。促音の場合も同様である。

以上より、山都町方言は、真性テ形現象（タイプTG）と擬似テ形現象（タイプPA）との共生タイプであると判断できる。同じような共生タイプは、長崎県諫早市飯盛町方言で観察されている（cf. 有元光彦（2009：19-23））。

### 3.4. 上津江町方言

本節では、上津江町方言のテ形音韻現象について記述する。【表7】に動詞テ形のデータを挙げる。I, J氏はいずれも70歳代の男性である。

【表7】上津江町方言の動詞テ形

語幹	I氏	J氏	意味
kaw<買う>	ko:ʧikita *kokkita	ko:ʧikita *kokkita	買ってきた
tob<飛ぶ>	tondekita *to:dʒikita	tondʒikita	飛んできた
asob<遊ぶ>	asu:dʒikita	asondʒikita asudʒikita	
jom<読む>	jondekita ¥ju:dʒikita	jondʒikita	読んできた
kas<貸す>	kafitekita *kja:tekita *kafʧikita	kafʧikita ke:ʧikita	貸してきた
kak<書く>	kaitekita *kaifʧikita	ke:ʧikita	書いてきた
ojog<泳ぐ>	ojoidekita ¥oi:dʒikita	oidʒikita	泳んできた

tor<取る>	tottekita * totf'ikita	totf'ikita	取ってきた
kat<勝つ>	kattekita * katf'ikita	katf'ikita	勝ってきた
sin<死ぬ>	f'inden * f'indzi	f'inden * f'indzi	死んで(も)
mi<見る>	mittekita * mittekita * mi'f'ikita	mittekita * mittekita mi'f'ikita * mitf'ikita	見てきた
oki<起きる>	okitekita okittekita * oki'f'ikita	okittekita oki'f'ikita * okitf'ikita	起きてきた
de<出る>	detekita * dettekita * de'f'ikita	detekita * dettekita de'f'ikita * detf'ikita	出てきた
uke<受ける>	uketekita * ukettekita uke'f'ikita * uketf'ikita	* ukettekita uke'f'ikita * uketf'ikita	受けてきた
i~it<行く>	itekita * i'f'ikita	%itekita i'f'ikita itf'ikita	行ってきた
ki<来る>	kitekure * ki'f'ikure	kitekurenkai ki'f'ikurenkai	来てみないか
s<する>	f'itekita * f'if'ikita	f'itekita f'if'ikita	してきた

【表7】から、I氏とJ氏の間にはかなりの違いがあることが分かる。まず、I氏においては、「テ」「デ」に相当する部分に [ʧi]~[dʒi] が現れる場合は、語幹末分節音が/w, b, e<sub>2</sub>/のときである。このうち子音は/w, b/だけであるので、高森町方言の場合と同様、次のようなルールを設定できる。

(10) e/i交替ルール (上津江町方言) :

語幹末分節音がXでない動詞語幹にテ形接辞/te/が続く場合、  
テ形接辞/te/の/e/を/i/に交替させよ。

X=/m, s, k, g, r, t, n/

弁別素性を用いて(10)を定式化すると、次のようになる。

(11) e/i交替ルール (上津江町方言) :

e → i / [ {-syl, +cor}, [+nas], [+back]}<sup>ε</sup> ] t \_\_\_\_ ]

一方、J氏の場合、n語幹動詞以外のすべてにおいて、「テ」「デ」に相当する部分に [ʃi] ~ [dʒi] が現れている。従って、n語幹動詞という例外はあるが、語幹末分節音の違いによる偏った分布は見られないと考えられる。

次に、一段動詞の否定形・過去形を挙げておく。

【表8】上津江町方言の一段動詞の否定形・過去形

	I氏		J氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	ʃmin miran	mita *mitta	ʃmin miran	mita *mitta
起きる	*okin okiran	*oketa okitta	ʃokin okiran	okita *oketa okitta
出る	ʃden deran	deta *detta	ʃden deran	deta *detta
受ける	uken *ukeran	uketa *uketta	uken *ukeran	uketa *uketta

【表8】から、 $i_1$ ,  $i_2$ ,  $e_1$  語幹動詞はr語幹化が進行していることが分かる。従って、 $e_2$  語幹動詞だけが/e/という語幹末分節音を保持していることになる。

以上より、上津江町方言の場合はインフォーマントによる違いがあり、I氏は擬似テ形現象方言（タイプPD'''方言）であると判断できる。一方、J氏は非テ形現象方言（タイプN2方言）である。

#### 4. 各方言の比較

本節では、本稿で扱った諸方言のテ形音韻現象を比較する。まず、共通語の「テ」「デ」に相当する部分に現れる音声を【表9】にまとめる。ここで、記号Qはいわゆる促音を表す。記号/は、その両端にある音声がいずれも現れる、即ちインフォーマントによって揺れがあることを表す。記号\$は音節数条件が関係していることを表す。また、記号（）は任意の要素であることを表す。

【表9】共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声の比較

語幹末分節音	高森町方言	産山村方言	山都町方言	上津江町方言
w	ʃi	te	ʃi	ʃi
b	dʒi\$	de	dʒi	dʒi (\$)
m	de	de	dʒi	de/dʒi
s	te	te	ʃi	te/ʃi
k	te	te	ʃi	te/ʃi
g	de	de	dʒi	de/dʒi
r	te	te	te	te/ʃi

t	te	te	te	te/ɸi
n	de	de	de	de
i <sub>1</sub>	ɸi	te	te	te/ɸi
i <sub>2</sub>	te	ɸi/te	te/ɸi, Q	te/ɸi
e <sub>1</sub>	ɸi	te	te/ɸi	te/ɸi
e <sub>2</sub>	ɸi	ɸi/te	ɸi, Q	ɸi
i~it<行く>	te	te	te	te/ɸi
ki<来る>	te	te	te	te/ɸi
s<する>	te	te	te	te/ɸi

第3節の記述, 及び【表9】から方言タイプをまとめると, 次のようになる。

(12)各方言の方言タイプ:

- a. 高森町方言: タイプPD<sup>'''</sup>方言
- b. 産山村方言: タイプPG方言/タイプN1方言
- c. 山都町方言: タイプTG=PA方言
- d. 上津江町方言: タイプPD<sup>'''</sup>方言/タイプN2方言

(12b, d)では, インフォーマントによって異なる方言タイプを持っていることになる。(12c)では, タイプTG方言とタイプPA方言が共生していることを示している。ここで重要なことは, ①タイプPD<sup>'''</sup>, PG方言が発見されたこと, 及び②共生タイプTG=PAが発見されたことである。①については5.で, ②については6.でそれぞれ詳述する。

また, 各方言で適用されるルールをまとめると, 次のようになる。<sup>7</sup>

(13)各方言のルール:

- a. 高森町方言:
  - (3) e/i交替ルール: e → i / {[-syl, +cor], [+nas], [+back]}<sup>c</sup> ] t \_\_\_\_ ]
- b. 産山村方言:
  - (5) e/i交替ルール: e → i / [-syl]<sup>c</sup> ] t \_\_\_\_ ]
- c. 山都町方言:
  - (7) e/i交替ルール: e → i / [-syl, +cor, -cont]<sup>c</sup> ] t \_\_\_\_ ]
  - (9) e消去ルール: e → φ / [-syl, +cor, -cont]<sup>c</sup> ] t \_\_\_\_ ]
- d. 上津江町方言:
  - (11) e/i交替ルール: e → i / {[-syl, +cor], [+nas], [+back]}<sup>c</sup> ] t \_\_\_\_ ]

ここで重要なことは, (13a), (13d) が同じであること, 即ち高森町方言と上津江町方言が同じルールを持っていることである。

<sup>7</sup> 「テ」「デ」に相当する部分に[te]~[de]が現れる際のルール, 即ちタイプN1, N2方言のルールについては省略してある。

## 5. 新たな方言タイプ

今回、新たな方言タイプが2種類発見されている。1つは「タイプPD'''方言」、もう1つは「タイプPG方言」と呼んだものである。これらを順に観察していく。

### 5.1. タイプPD'''方言

この方言タイプは、高森町方言に見られるものである。前述のように、高森町方言は次のようなルールを持っている。

(3) e/i交替ルール (高森町方言):

$$e \rightarrow i / \{[-\text{syl}, +\text{cor}], [+nas], [+back]\}^c \text{ t } \_\_\_ ]$$

有元光彦 (2007b: 30–32) によると、(3)の適用環境である $X = \{[-\text{syl}, +\text{cor}], [+nas], [+back]\}$ の集合は、理論的には予測されているものの、未発見のタイプであると記述されている。即ち、この集合は、有元光彦 (2007b) の段階では、理論的には、(4)のように、XD''とXGとの中間的なものとして予測されていた。

(4) XD'' :  $\{[-\text{syl}, +\text{cor}, -\text{cont}], [+nas], [+back]\}$

$\subset ? : \{[-\text{syl}, +\text{cor}], [+nas], [+back]\}$

$\subset \text{XG} : \{[-\text{syl}], [+nas], [+back]\}$

(cf. 有元光彦 (2007b: 31))

(4)の記号?で表したタイプは、XD''の集合から[-cont]という積集合を外したものである。また、同時にXGの集合に[+cor]を積集合演算したのものである。<sup>8</sup> その意味で、記号?で表したタイプは、XD''とXGの中間的な集合となっている。

方言タイプで考えるならば、XD''を適用環境とするルールは、タイプPD'''方言が持っている。また、XGを適用環境とするルールは、タイプTG方言が持っている。従って、記号?を適用環境とするルールは、その中間的な方言タイプが持っていることになるが、現時点までは発見されていなかった。高森町方言はまさにこのタイプであり、理論上予測された方言タイプが発見されたということになる。

言うまでもなく、タイプPD'''方言は擬似テ形現象方言であり、タイプTG方言は真性テ形現象方言である。従って、厳密には高森町方言は中間的な方言ではない。高森町方言は擬似テ形現象方言であるので、厳密にはタイプPD'''方言とタイプPG方言の中間的な方言タイプということになる。そうすると、タイプPG方言は存在するのかという議論になるが、前述したように、タイプPG方言も今回新たに発見されたのである (cf. 5.2.)。タイプPG方言の存在が、タイプPD'''方言との中間タイプを理論的に予測し、実際その存在が発見されたのである。それゆえ、暫定的ではあるが、この中間タイプを「タイプPD'''方言」と名付けたのである。<sup>9</sup>

<sup>8</sup> この集合演算は、「遺伝子組み換え」ならぬ「情報子組み換え」「情報子操作」と考えている。これは、テ形音韻現象を構成的に捉えようとする試みの1つである。詳細は、有元光彦 (2007b, 2010b) を参照されたい。

<sup>9</sup> ちなみに、タイプPD'''方言は、長崎県南島原市加津佐町に見られる。

## 5.2. タイプPG方言

この方言タイプは産山村方言に見られる。産山村方言は次のようなルールを持っている。

(5) e/i交替ルール（産山村方言）：

$$e \rightarrow i / [-\text{syl}]^c ] t \_ ]$$

この方言タイプは、前述したように、新発見である。適用環境だけを考えるならば、同じXG=[-syl]を適用環境とするルールを持つ方言タイプにタイプTG方言がある。タイプTG方言は、次のようなルールを持っている。

(15) e消去ルール：

$$e \rightarrow \phi / [-\text{syl}]^c ] t \_ ]$$

(5)と(15)を比べると分かるように、適用環境は同じであるが、入出力が異なっている。しかし、同じ適用環境XGを持つ方言タイプが、真性テ形現象方言だけでなく、擬似テ形現象方言にも発見されたという点は、理論的にも意義がある。理論的な問題については次節で詳述する。

## 5.3. タイプPD'''，PG方言の理論的示唆

タイプPD'''，PG方言の存在は、様々な理論的な示唆を与えてくれる。まず、現時点までに存在が確認されている真性・擬似テ形現象方言を次にリストアップしてみる。【表10】は有元光彦（2007b:33-34）に今回発見された方言タイプを加え、整理しなおしたものである。ボールド斜体字の方言タイプが今回発見されたものである。

【表10】真性・擬似テ形現象方言の方言タイプ

真性テ形現象方言	擬似テ形現象方言	X
TA	PA	XA=[-syl, +cor, -cont]
TA# (=TB)		
	PA#	
	PA##	
TA\$ (=TA') <sup>10</sup>		XA'=[[-syl, +cor, -cont], [+back, +voice]]
	PA'	
TC		XC=[-syl, +cor]
TD		XD=[[-syl, +cor, -cont], [+nas]]
TD\$ (=TD')		
	PD'	XD'=[[-syl, +cor, -cont], [+nas], [+back, +voice]]
	PD''	XD''=[[-syl, +cor, -cont], [+nas], [+back]]
	<b>PD'''</b>	XD'''=[[-syl, +cor], [+nas], [+back]]

<sup>10</sup> タイプTA'，TD'方言は、音節数条件に支配されているので、タイプPA'，PD'方言とは異なるという意味で、プライム記号は付けない方がいいのかもしれない。従って、「タイプTA\$，TD\$方言」という新しい表記を採りたいが、過去の拙論を参照する便も考慮し、元の名称を丸括弧付きで示しておく。

TE		XE={[-syl, +cor], [+nas]}
TF		XF=[-syl, -cont]
TG	<i>PG</i>	XG=[-syl]

【表10】から分かるように、テ形音韻現象ルールの適用環境Xで分類すると、真性テ形現象方言と擬似テ形現象方言の方言タイプは、おおよそ平行に存在する。おそらく両者は“対称性（シンメトリー）”を成すものと考えられる。従って、テ形音韻現象においては、適用環境が重要な役割を果たしていることが分かる。ただ、【表10】を注意深く観察すると、空欄も見られる。空欄は、まだ発見されていない方言タイプであるが、存在するが未発見であるのか、それともそもそも存在しないのかは、現時点では判断できない。もし后者であるとする、対称性を成すのは、適用環境がXA, XGのときだけということになる。XAの集合が最も均衡性（安定性）が高いことは、有元光彦（2007a：184）の次の仮説が発言している。

(16)“均衡化”の仮説：

真性テ形現象・擬似テ形現象を引き起こす（音韻ルールの適用）環境は、  
[-syl, +cor, -cont] という集合で均衡化する。

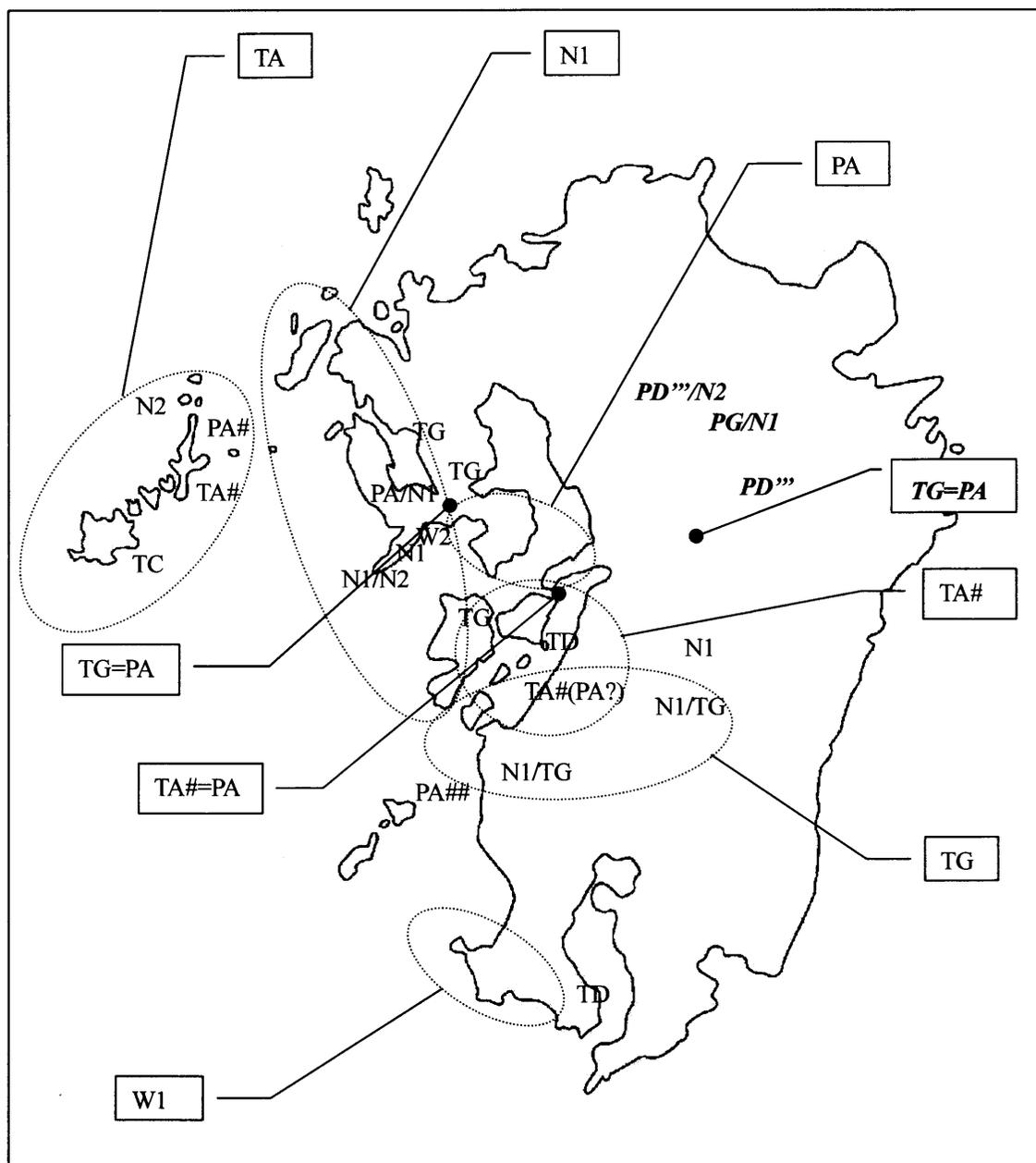
また、XGは真性テ形現象の中で非テ形現象化の最たるものである。従って、XA, XGという非テ形現象化の尺度の上で、両端に位置する場合のみ対称性を成しているのである。

一方、最も均衡性の高いXAと最も均衡性の低いXGの中間に位置するXDには、様々な変種があり、厳密な対称性を成しているとは言い難い。擬似テ形現象方言のD系列だけでも、PD', PD'', PD'''という3種類があることから、混沌とした状態になっている。ひょっとすると、この中間的な場合こそが非テ形現象化が盛んに起きているところなのではないだろうか。この多様性の解明は非テ形現象化の本質を解く鍵となろう。

## 6. 地理的分布

本節では、現時点までに得られたテ形音韻現象の地理的問題を記述する。

テ形音韻現象の地理的分布を【図1】に示す。方言タイプをボールド斜体字で記している箇所は、本稿で扱った対象である。【図1】では、記号/は両方の方言タイプが観察されたこと、記号( )はその方言タイプの名残が見られることを、それぞれ表す。また、記号?は当該の方言タイプであるかどうか確定していないことを表す。



【図1】九州方言のテ形音韻現象の地理的分布

【図1】から分かるように、高森町・産山村・上津江町方言はすべて擬似テ形現象方言であり、地理的にもまとまった分布を成している。しかも、産山村・上津江町方言では、非テ形現象方言も見られることから、地理的には、擬似テ形現象方言圏の最東端ではないかと推測される。一方、山都町方言は共生タイプである。この共生タイプTG=PAは、前述したように、長崎県諫早市飯盛町方言にも現れている。飯盛町方言の共生タイプは、【図1】からも分かるように、タイプPA方言圏とタイプN1方言圏の接触地域に位置している。このことから予測すると、山都町方言も同様である可能性が高い。【図1】を見ると、タイプPA方言圏は熊本県の

三角半島全域を覆っている。この方言圏がもう少し東まで分布し、しかも山都町方言の東側にタイプN1方言圏が分布しているならば、山都町方言はタイプPA方言圏とタイプN1方言圏の接触地域に位置することになる。そうすると、共生タイプの成立過程を解明するためのさらなる証拠が得られる可能性が出てくる。今後の調査の課題である。<sup>11</sup>

また、共生タイプに関しては、成立過程の問題だけでなく、2つの方言タイプの組み合わせの問題も残っている。タイプPA方言とタイプN1方言が接触したときに、なぜN1=PAではなく、TG=PAとなるのか。また、なぜTG=PA, TA#(TB)=PAという組み合わせしか発見されていないのか。理論的な問題として捉えていく必要がある。

## 7. おわりに

本稿では、熊本県北東部方言及び大分県中西部方言を取り上げ、そこに現れるテ形音韻現象を記述した。そこから、次のような成果を得た。

- ①タイプPD”, PG方言の発見。
- ②共生タイプ (TG=PA) の発見。
- ③真性テ形現象方言と擬似テ形現象方言は対称性を成す (特にXA, XGにおいて)。
- ④XD系列は多様性を示す。
- ⑤テ形音韻現象においては、それを司るルールの適用環境が重要な役割を果たす。

今後は、存在する可能性が高い方言タイプを理論的に予測するとともに、新たな方言タイプの発見に努めていきたい。また、本稿では通時的な問題は扱わなかったが、得られたデータにはインフォーマントが古い形であると認識しているものが多々見られた。このようなデータが理論構築にどのように寄与できるのか、慎重に吟味していきたい。

## 【参考文献】

- 秋山正次 (1983) 「熊本県の方言」『講座方言学9 九州地方の方言』 飯豊毅一ほか編 国書刊行会 pp.207-235.
- 有元光彦 (2005) 「日本語の中の「九州方言」・世界の言語の中の「九州方言」⑤ことばの道—海の道—」『日本語学』 2005年9月号 明治書院 pp.74-82.
- (2007a) 『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』 ひつじ書房
- (2007b) 『方言研究の構成的アプローチの試み—九州方言の動詞テ形・タ形における形態音韻現象—』 平成16~18年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究 (C) (2) 「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」 (No.16520281, 研究代表者: 有元光彦) 研究成果報告書
- (2008) 「再訪: 熊本県天草方言の動詞テ形における形態音韻現象」『言語の研究—ユーラシア諸言語からの視座—』 (語学教育フォーラム 第16号) 大東文化大学語学教育研究所 pp.357-374.
- (2009) 「長崎県中南部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢 (山口大学教育学部)』 第58巻 第1部 pp.15-31.

<sup>11</sup> 藤本憲信(2002)には、データがカタカナ表記で、しかも一部の必要なデータが提示されていないが、それでもかなり詳細な多数のテ形データが挙げられている。このデータから分析すると、菊池方言はタイプPA方言のようである。この方言タイプの分布はかなり広いのかもしれない。

- (2010a) 「熊本県本土西部方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢（山口大学教育学部）』 第59巻 第1部 pp.35-52.
- (2010b) 『テ形音韻現象における構成的アプローチの試み』 平成19～21年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・挑戦的萌芽研究「方言研究における構成的アプローチの構築」(No.19652941, 研究代表者：有元光彦) 研究成果報告書
- (2011) 「熊本県本土南部・鹿児島県本土北西部方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢（山口大学教育学部）』第60巻・第1部, pp.25-38.
- Chomsky, N. & M. Halle (1968) *The Sound Pattern of English*, Harper & Row.
- 藤本憲信 (2002) 『熊本県菊池方言の文法』 熊本日日新聞情報文化センター
- 糸井寛一 (1983) 「大分県の方言」『講座方言学9 九州地方の方言』 飯豊毅一ほか編 国書刊行会 pp.237-266.
- Kenstowicz, M. (1994) *Phonology in Generative Grammar*, Blackwell Publishers.
- 小林隆ほか (2008) 『シリーズ方言学1 方言の形成』 岩波書店
- 九州方言学会編 (1991) 『九州方言の基礎的研究 改訂版』 風間書房
- Mohanan, K.P. (1986) *The Theory of Lexical Phonology*, D. Reidel Publishing Company.